

平成21年 5月 1日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520523
 研究課題名（和文） 昭和前期日本の社会・文化史と台湾—台湾知識人精神史の記録化

研究課題名（英文） Japanese Society and Culture in Early Showa Era — Recollections of Taiwanese Intellectuals

研究代表者
 大谷 渡（OOYA WATARU）
 関西大学・文学部・教授
 研究者番号：80340644

研究成果の概要：昭和前期に日本の高等教育機関に学んだ台湾知識人の日本統治下における日本認識と、台湾社会での活躍や役割、さらにはその心情について、聞き取り調査によってその生の声を記録化し、当時の新聞、雑誌、公文書、手紙、手記などとの照合検討をとおして、これを社会・文化史的観点から多角的かつ具体的に解明した。その成果は『台湾と日本 激動の時代を生きた人びと』（大谷渡、東方出版、1頁－244頁、2008年）として出版した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	420,000	2,920,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：近現代史・植民地史

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象となった人たちは、日本の政党政治確立期の現代的文化が広がった昭和初期に初等教育を受け、中等教育を経て高等教育機関に学ぶころに、戦争の時代を迎えた世代である。日本の専門学校や大学で高い知識を身に付けたエリートの彼らが、日本の近代化とその文化をどう受けとめ、「台湾の幸福」をどのように実現しようと考えたのか、その心の襞にまで分け入った分析は、本研究によって初めて可能となった。本研究が目指したような研究が

従来見られなかったのには、いくつかの理由が考えられた。

特に大正・昭和前期の日本の社会・文化史に精通していることと、台湾知識人に対する台湾での聞き取り調査基盤の整備という2つの条件を満たすことが台湾人研究者にも日本人研究者にもなかなかむずかしかったことが原因であると思われた。本研究の代表者大谷は、『教派神道と近代日本』（大谷渡、東方出版、1頁－222頁、1992年）や、『大阪河内の近代』（大谷渡 東方出版、1頁－254頁、2002年）において、

大正・昭和前期の日本の社会と文化の諸相を徹底した史料収集の上に立って分析し、その際に聞き取り調査の手法も合わせて用いて考察した経験があった。そして、何よりも重要なことは、『北村兼子一炎のジャーナリスト』（大谷渡 東方出版 1頁-260頁、1999年）が平成16年と平成17年の科学研究費補助金による台湾の知識人を対象とした研究の基礎となり、林猷堂および彼を取り巻く台湾知識人と、昭和初期に国際的に活躍したジャーナリスト北村兼子との思想的交流の詳細を明らかにすることができ、しかも両年における台湾での調査によって、日本統治下で高等教育機関に学んだ幾人もの人たちに出会うことができ、本研究の基盤を整えることができた。

本研究において調査対象として協力いただく人びとは80歳代という高齢ではあるが、壮健で活躍している人も多く、今ならば、この人たちの口述資料を記録化することは可能であるものの、時間的にみれば今の時期が本研究の実施できる最後の機会であろうと考えられた。

本研究は、平成16年と平成17年の科学研究費補助金による研究成果、すなわち大正中期中以降1920年代に日本の大学・専門学校に学んだ人びとの思想史・精神史の解明の上に立って実施計画を立てたものであった。日本統治下における台湾知識人の思想史・精神史の全体からいえば、大正中期中以降1920年代は前半部分にあたり、本研究において対象とした1930年代から終戦に至る時期は後半部分を構成するものであった。

本研究の完成によって、日本統治下の大正・昭和期に日本の高等教育機関に学び「台湾の幸福」を求めた台湾人知識人の、日本認識とその心の歴史の全体像が初めて明らかになり、近現代日本の社会文化史と日本統治下の台湾史研究に新たな地平を開くことが想定された。平成16年と平成17年の研究成果と本研究の成果は、現代日本と台湾の人びとの歴史理解と将来の文化理解に貢献することを目的として、一般書として刊行する計画を立てた。

2. 研究の目的

本研究は、昭和前期日本の高等教育機関に学んだ台湾知識人の日本統治下における日本認識と、台湾社会での活躍や役割、さらにはその心情について、社会・文化史的観点から多角的かつ具体的に解明することを目的とし、その精神史をたどることを主眼とした。

2005年の科研による台湾での調査の折、

東京女子医学専門学校（現在の東京女子医科大学）卒業の最初の台湾人女医蔡阿信が開業していた清信医院を知っているという蘇天賞医師に会うことができた。蘇天賞医師は1921年の生まれ。台北帝国大学附属医学専門部を卒業し、台中市内で産婦人科医院を開業した。

蘇天賞の姉永治が蔡阿信の清信医院に通って治療を受けていて、少年の頃の天賞がよく姉を迎えに行っていたという。昭和の初めのことである。蘇永治はのちに、日本女子歯科医学専門学校（現在の神奈川歯科大学）を卒業した。兄弟姉妹9人のうち4人が、日本の医専や医科大学を出て医師となった。蘇天賞が医師となったのには、心臓が弱かった母を健康にしたかったという、少年の頃からの思いがあった。両親のこと、兄弟姉妹のこと、子どものころのこと、中学校時代や大学時代のことなど、蘇天賞医師からいろいろと話を聞くことができた。

私の台湾の旅は、北村兼子の足跡を訪ねるところから始まった。それは北村とのかかわりを入り口にして、1920年前後に日本の大学に学んだ台湾の人たちの思想と行動を尋ねることでもあった。日本と台湾との関係史の中に、大正・昭和初期の時代状況を浮び上がらせてみたいという思いがあった。この私の思いは、蘇天賞医師と出会ったことで時代の幅を広げることになった。

1920年前後に学生だった人びとはすでに他界し、もはや直接話を聞くことはできない。その時期に生まれた人たちからは、日本の教育を受け日本統治下で成人し社会的活動を始めた時期までのさまざまな思い出を聞かせてもらうことが可能である。この人たちは、日本の政党政治確立期の現代的文化が広がった昭和初期に初等教育を受け、中等教育をへて高等教育機関に学ぶころに、戦争の時代を迎えた世代である。日本の専門学校や大学で高い知識を身に付けたエリートの彼らは、統治者である日本とその社会や文化について、どのように考えていたのだろうか。この人たちの心の壁にまで分け入って、その真実の思いに迫ろうとしたのが本研究の目的であった。

3. 研究の方法

本研究において研究の対象とした時代を知るためには、当時の新聞や雑誌、手紙・日記・手記・公文書など、さまざまな記録を丹念に読み解くことが大切である。だがなんと言っても、その時代を生きた人からの直接の話にはインパクトがあり、しみじみと心に伝わる心情がある。もちろん記憶には、思い違いがあったり、その後の

人生との関連で錯綜が生じたりする場合があるものの、それは文字資料との照合検討を通して克服できる部分であって、やはり直接の話には他では得られないものがある。

70年も80年も前の話は、いま聞いておかなければ二度と再び触れることはできない。ホテルのロビーで、あるいはその人の自宅で、私は語り手とともに2時間、3時間、またはそれ以上、回想の中に引き込まれたことがしばしばであった。

本研究では、日本統治下に生まれ育った30人近い人びとから直接取材し、その生の声を記録するとともに、公文書・新聞・雑誌・手記・手紙等の文字資料との照合検討をとおして、昭和前期における台湾知識人の日本認識、社会文化認識を具体的に解明した。

4. 研究成果

はるか昔の日本時代を懐かしむ穏やかな顔と、日本の戦争責任を鋭く断罪するきびしい視線。日本に対する台湾の二つの顔は、戦後史とも深く関わるものの、日本統治下の歴史を抜きにしては語れない。台湾の人びとが日本統治下でどのように生きたのか。その時代と人びとの心の壁に目を向けて初めて、台湾と日本の真実に迫ることができた。

大正・昭和初期に政治経済を論じ国際的に活躍した北村兼子と、台湾議会設置請願運動で知られる林献堂との思想的交流を明らかにすることから始めた私の研究は、大正中期に日本で高等教育を受け台湾文化運動の担い手となった人たちの足跡をたどり、さらには大正中期に生まれ育ち日本の大学や専門学校に進み、戦争、敗戦を迎えた人びとの半生と心の歴史に迫る研究へと進展した。台湾での現地調査に基づく研究成果は、2008年4月に『台湾と日本 激動の時代を生きた人びと』（東方出版刊）として出版した。民族運動、デモクラシー、戦時下の教育、空襲体験などを綴った同書は、日本図書館協会選定図書となり、出版と同時に『産経新聞』（2008年4月12日付夕刊）、『中日新聞』（同年4月20日付朝刊）、『読売新聞』（同年6月12日付夕刊）、『東京新聞』（同年6月12日付夕刊）、『毎日新聞』（同年9月19日付夕刊）などの書評欄や文化欄に取り上げられ、読者からも幾通かの手紙が寄せられ、「新しい知見を得た」、「同様の本の出版を期待する」との好評を得た。

『台湾と日本 激動の時代を生きた人びと』の構成は次のとおりである。

はじめに

二つの顔／文化運動の世代／新たな出会い

第一章 名家に生まれて

台南の富豪／小学校へ転校／台南一高女／違和感に心を砕く／日本女子大へ進学／信念を曲げずに／台湾に帰って

第二章 医者と技術者

地域医療のために／公学校から台南二中へ／台北帝大医専部／台南二中の同級生／海軍第六燃料廠から受注

第三章 女医を目指して

台北のホテルで／父の思い出／新竹高女に入学／高女の先生たち／東京女子医専へ／台北帝大附属病院／台中のホテルで／彰化高女へ／李朝湖との再会／台中市内の自宅で／女子医専、その後

第四章 蔡阿信と彭華英

故国への思い／『台湾青年』の発刊／清信医院／「台湾文化協会」の分裂／彭華英の政治的立場／「コスモ倶楽部」と彭華英／「要視察人」報告に関して／文化運動と女性論／『台湾民報』とフェミニズム／女性運動の左傾化

第五章 北村兼子と台湾

北村兼子について／婦人文化講演会／聴衆大いに沸く／台南の一日本人女性／林献堂家の人びと／『新台湾行進曲』／民族運動への関心／「台湾民族運動史」／反感の止むとき／「台湾の幸福」への共感／国際婦人平和主義／中止を命じられた講演／陳炯の手紙

第六章 台中一中で学んだ人たち

台中第一中学校／楊基銓とその叔父／バスケットボール部の秀才／台中一中の思い出／母のこと、父と兄のこと

第七章 日本から満州へ

美しい海岸線／台南二中から浦和高校へ／東京帝大医学部へ／終戦、そして苦難／台北板橋を訪ねる／新竹女子公学校／高女での出来事／女子医専、結婚、満州

第八章 戦争の記憶と体験

台中学徒兵／空襲の体験／戦時下の青春／初年兵七か月／除隊後のことなど／台南善化の実業家／台南高等工業へ進学／ニューギニア戦線／死線を越えて／出征までのこと

第九章 空襲と敗戦

台湾警防団令の公布／疎開と防空訓練／志願兵、軍属、看護助手／大空襲始まる／防空の実態／空襲の激化／

建物被害について／終戦前後の状況
あとがき
文献一覧

ところで、日本においては、マリアナ基地発進のB29爆撃機による日本本土空襲の記録化や研究が大いに進展していて、数多くの文献、論文が発表されている。だが、戦争末期に米軍による台湾への激しい空襲があったことは日本では知られていない。台湾においても、統治下にあった台湾の人びとが疎開を強いられ、空襲の恐怖にさらされ、大きな被害を受けた。この事実も当然のことながら、等閑視されてよいはずはない。太平洋戦争中に、徴用や徴兵によって台湾の多くの人びとが犠牲になった事実とともに、空襲による被害についても忘れてはならない。

台湾への米軍機による最初の本格的空襲は、1944年10月12日であった。『第十(台湾)方面軍作戦記録 台湾及南西諸島』(昭和二十一年八月調製)によると、12日に延べ約1200機、翌13日には延べ約1400機の艦上機と艦載機が来襲した。攻撃目標は、台北・桃園・新竹・台中・嘉義・岡山・屏東・小港を主とする全島の航空基地と、港湾、船舶、一部市街、工場、交通機関であった。10月12日から17日の空襲による死傷者は1875人、うち死亡711人、行方不明9人、重傷366人、軽傷749人であった。建物被害は、住家全壊766、半壊532、大破691、小破2355、全焼1076、半焼101、一部焼44、計5565棟、非住家(工場建物を含む)の全壊92、半壊59、大破104、小破82、全焼125、半焼8、一部焼7、計477棟となっており、一般住家の被害が圧倒的に大きかったことがわかる。1945年1月3日から同年8月12日までの米軍の空襲による死傷者は1万3897人、うち死者5389人である。この間における建物被害の総数は4万276棟、うち全壊9167棟、全焼1万5013棟であり、全壊全焼の合計は2万4180棟であった。

本研究では、台湾への米軍による空襲の実態を総督府及び台湾軍関係の史料と聞き取り調査によってその詳細を明らかにした。

台湾における資料調査の過程において、日本統治下に生まれ育った30人近い人びとから直接取材し、その生の声を記録した。この調査は、日本統治下で高等教育を受けた人びとが、日本の近代化とその文化をどう受けとめ、「台湾の幸福」をどのように実現しようとしたのか、その精神史をたどることを主眼としたが、取材過程で空襲・出征・敗戦に関する生々しい記憶と体験に触れることになり、その史実を総合的に解

明する研究へと発展させる基盤を整えることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ①「記憶の中の台湾と日本(3)-統治下において高等教育を受けた人びと」大谷渡、『関西大学文学論集』、第58巻第4号、1-21(2009)、査読無
- ②「1945年米軍空襲下の台湾」大谷渡、『南島史学』、第70号、98-109(2007)、査読有
- ③「記憶の中の台湾と日本(2)-統治下において高等教育を受けた人びと」大谷渡、『関西大学文学論集』、第57巻第2号、27-57(2007)、査読無
- ④「記憶の中の台湾と日本-統治下において高等教育を受けた人びと」大谷渡、『関西大学文学論集』、第56巻第4号、47-71(2007) 査読無

〔学会発表〕(計2件)

- ①「1945年米軍空襲下の台湾」、大谷渡、静宜大学2007年5月19日「日本學與台灣學」國際學術研討會(2007)
- ②「北村兼子と台湾」、大谷渡、静宜大学2006年5月20日「日本學與台灣學」國際學術研討會(2006)

〔図書〕(計1件)

- ①『台湾と日本 激動の時代を生きる人びと』大谷渡、東方出版、1-244(2008)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大谷 渡(OOYA WATARU)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：80340644